

絵本にみる「仕事とはどのようなものか」(2)

齊 藤 毅 憲

1. 問題の設定

本稿の問題意識やねらいについては、本論叢（人文科学系列）第68巻第3号の同名タイトル（1）においてすでに述べているので、再言はしない。今回の（2）では、絵本における「仕事」が、とりわけライフとどのようにかかわっているかという観点で検討してみる。

ライフの意味は、よく知られているが、ここでは主にふたつの意味をもつものとする。ひとつは、いうまでもないが、日々の生活である。われわれが毎日生きて生活しているその日常生活のことである。そして、もうひとつは、このような日々の生活をくり返し積み重ねてつくられていく人生（生活生涯）のことである。

仕事やキャリア（職業生涯）の問題を考えるうえで検討しなければならないのは、このライフとの関係である。そこで、本稿では、まずライフ自体に関する2冊の絵本を取りあげ、その意味を考えたい。つぎにそれをふまえて、仕事とライフの関係を分析するのに役立つと思われる5冊を選び、最後に総括的な検討を行う。

2. ライフに関する絵本の事例

- ①『葉っぱのフレディ』（アメリカ）
- ②『かえでの葉っぱ』（チェコ）

(1) ライフの意味

ライフとは日々の生活のことであり、また生活の積みかさねによる人生、生涯のことである。そして、後者に着目して、生きている間または生きて生活している期間がライフになる。ということは、この生きている間には始まり（誕生）があり、そして終り（死）があることを意味する。つまり、ライフは、生死の問題でもある。

(2) ライフには「役割」があることを主張した『葉っぱのフレディ——いのちの旅』

レオ・バスカーリア (Leo Buscaglia) の『葉っぱのフレディ』(*The Fall of Freddie the leaf*, 1982、みらい なな訳、島田光雄画 童話屋、1998年) は、日本でもよく知られている。作者はアメリカの著名な哲学者である。5名の写真家による写真と島田光雄のさし絵が描かれており、写真もさし絵もすてきなものである。

春に生まれた葉っぱのフレディは、夏になると大きく成長し、いろいろな役割を果たす。しかし、その後秋が来て紅葉し、さらに冬になると木から離れて「引越し」、つまり死を迎える。春から夏、そして秋になって葉っぱが緑から紅葉して変化するように、木を離れて引越すこともその変化のひとつであり、それは自然なことだという。この絵本では、人生の「終り」の意味を明らかにするとともに、人生をよく言われる「春・夏・秋・冬」にたとえている。ストーリーは大体以下のとおりである。

葉っぱのフレディは春に大きな木の太い枝で生まれ、夏には厚みのある立派な葉に成長している。その枝には多くの仲間がいるが、フレディと仲間とは同じ葉ではなく、皆それぞれがちがっていることに気づいている。

フレディの親友は、だれよりも大きく、考えることが好きな物知りのダニエルであり、彼はフレディに自分たちのことのほかに、周囲や自然のことなどを教えている。そして、フレディは葉っぱに生まれてよかったと思

うようになっている。友人は多く、見晴らしや風通し、日当たりもよく、夜になると月の光で照らされている。

夏がきて太陽は早く昇り遅く沈むので、たくさん遊んでいる。かんかん照りの熱さも気持ちよく、夏はうれしい季節であった。そして、ダニエルの呼びかけで、皆で体を寄せあって人間たちの涼しい木陰となり、葉をそよがせて涼しい風を送っている。ダニエルは「これも葉っぱの仕事なんだよ」と言う。

楽しい夏が終り、秋となって寒さがおそってくる。冷たい霜の時期となり、葉っぱたちは震えだしている。緑色だった葉っぱは赤や黄色に紅葉して美しくなり、人びとの目を楽しませている。そして、一緒に生まれた枝の葉っぱでも、場所が少しでもちがえば太陽のあたり方、風の通り具合などが異なるので、色のつき方はそれぞれにちがっており、さし絵に描かれたフレディは赤と青と金色の3色、ダニエルは深い紫色に変わっている。そのほかの仲間たちもさまざまに美しくなっている。

冬のおとずれとなる風はこれまでとまったくちがってきびしくなり、なかまの葉っぱたちが吹きとばされ、つぎつぎに落ちていく。ダニエルは引越しのときがきたと言う。フレディが居心地のいい夢のようなところから自分も去らなければならないのかと聞くと、太陽や月から光をもらい、雨や風に励まされて育てられて、木や人間に葉っぱとしての「仕事」をすべて行って立派に「役割」を果たしたので、もうすぐ引越すのだと返している。

引越しが死であることを知ったフレディは、死がこわいと言う。するとダニエルは、たしかにそのとおりだが、どんなことも未経験だとこわいものであると言い、すべてのものは変化するのが自然であり、緑色が紅葉で色が変わり、そして引越す(散る)のもそれと同じであると加える。つまり、死も変化のひとつであり、なんでもないことだと教える。フレディはこれを聞いて安心している。

ダニエルは満足そうにほほえんで静かにいなくなり、翌日の初雪のとき

に、フレディもふわふわした居心地のいい雪の上に引っ越していく。

以上が主なストーリーであるが、さらにいえば、哲学者である作者は「いのち」の永遠性や連続性ということも主張している。ダニエルに、葉っぱのついた木もいつかは死ぬが、「でも、いのちは永遠に生きている」と言わせ、たくましい木を離れながら、フレディはこの木ならいつまでも生き続けるにちがいないと思っている。そして、本文の終わり、本人は知らないが、枯れ葉になった彼は、冬が終って春がくると、雪どけ水に混じって土に溶けこんで木を育て、新しい葉っぱを生み出す力になったと述べている。

さて、この絵本は木の葉っぱを事例にして、人間のライフを考えさせてくれる。まずここでは、人生を春・夏・秋・冬にたとえる、「人生四季論」(フォー・シーズン・オブ・ライフ)というべきものが注目される。

春は誕生から成長に向かう若者のステージである。そして、夏になると大きく成長し、木を支えるとともに、木陰や涼しい風を人間に提供する。それは仕事を行う大人のステージである。秋は紅葉の美しい季節であり、仕事の一線からは退くものの、それなりの役割を果たす喜びとをイメージさせる。さらに、冬がやってきて少しずつ葉っぱは木から離れていき、やがてすべてが引っ越しをしていく。しかし、つぎの年、そこにはまた新しい葉っぱが生まれ、いわゆる「世代交代」が行われ、いのちの永遠性や連続性がつくられることになる。

この絵本では、葉っぱの春・夏・秋・冬を写真と絵で美しく表現している。色は当然のことながら、緑と赤や黄色がほとんどである。そして、終りに枯れ葉がでてくる。

つぎに注目すべきは、ライフには役割があり、木や人間のために葉っぱとしての仕事を行い、意識しようとしまいと、それによって役割を果たしているという認識である。作者はダニエルに、「僕らは春から冬までの間本当によく働いたし、よく遊んだ」と言わせ、夏や秋には木や人間のために役立ち、その役割を果たしながら楽しさと幸せを感じたとも言っている。

つまり、仕事の遂行は彼らに満足感や幸せ感をもたらしたのである。

このような認識は、人が働き生き、そしてこの世から引越していく際の貴重な指針になると考える。作者はこの絵本のターゲットを、①死別の悲しみに直面した子どもたち、②死についてうまく説明できない大人、③死に無縁のような若者に行っているが、それは妥当であろう。

もうひとつ指摘したいのは、葉っぱは皆ちがっており、個性や独自性も持っているということである。春の成長のステージですでに明らかになっているが、人間がひとりとして同じでないように、葉っぱもそうなのである。これは紅葉のときに、おかれている環境により色のつき方がそれぞれちがっていることでも示されている。ということは、夏や秋に行う仕事や役割も葉っぱによって少しずつちがうのである。そして、引越しの時期はそれほどちがわないが、少しのズレは見られており、おそらく人のいのちも同じようなものであろう。

(3) ライフに「冒険の旅」をみた『かえでの葉っぱ』

ムラースコヴァー (D. Mrazkova) 作の『かえでの葉っぱ』(Javorovy list-Auto z pralesa, 1975、関沢明子訳、出久根育絵、理論社、2012年)は、チェコの美しい風景のなかを1年かけて冒険の旅に出る物語である。絵は日本人によるもので、本文にたがわぬきわめて芸術性の高い力作である。葉っぱは秋になって木を離れるが、それはフレディにおける引越し(死)ではなく、旅のスタートを意味している。そして、引越しは1年後の秋にやってくる。主なストーリーは、以下のとおりである。

大きなガケの斜面にカエデの木があり、一枚の大きな葉っぱがついていた。それは金色で、片方のふちがピンクになっていて、青い空にも灰色の空にもひきたっており、秋の風に乗って遠くまで飛んでいきたいと望んでいた。

飛びたつ日がやってきて木から離れるが、期待したほど遠くに行くことができず、大きな石のすきまに落ちてしまう。葉っぱはがっかりするが、

そこで誕生日にもらったハンマーで懸命に石をたたいて銀を探す少年と出会う。葉っぱは好奇心をもって見ながら、少年と言葉を交わしている。

風が吹いてくると、少年が「風に乗せてあげようか」と言い、葉っぱはOKをだす。少年はまたいつか戻ってきて、旅の話をしてほしいと応答する。少年は風が強くなるのを待って葉っぱを風に乗せてくれる。「いい少年だなー」、「きれいな葉っぱだなー」とふたりの間には、好感と信頼の関係が生まれている。

葉っぱは旅の初めに飛んでいるツバメからとても美しいと見られ、畑に降りると葉っぱは畑からいい栄養となると思われてそこから逃げだす。すてきな草原を見つけて入っていくと、子どもたちがきれいな葉を押し葉にしようとする。やはりそこから逃れて、小川に浮かんで流れていく。このとき、葉っぱは小さな虫が自分に乗ってひと休みしていること、そして自分が黒っぽくなっていることに気づいている。

風が吹いて再びまきあげられ、森の草のまばらな大地に到着する。葉っぱはもとの美しさはすでになく、とても悲しくなっている。そして、季節は冬になる。霜がおりて、葉っぱは白い線で体のあちこちに模様ができ、少年に見せたいほどきれいになっている。まもなく長い寒い雪の世界となり、葉っぱは静かにこれまでのことを思い出したり、自由な時間をすごしたりしている。また、そばにいる春を待つヒナギクの力強さを感じている。

雪が溶けだして春になり、自分が黒褐色ではなく、細い灰色のクモの巣のような骨だけの姿に変わっていた。前と比べると変な姿だがこれも悪くないと思い、体がかわくと再び風に飛びのっている。いまでは体は軽く、しかも目立たなくなったので、危険は少なくなり、あたりをなんでもよく見られるようになっていく。とはいえ、一羽のスズメが葉っぱを巣もっていこうとするので、なんとかすりぬけて逃げだしている。ここで、自分は「旅する葉っぱ」だから、ひとつの場所に定住できないのだと断言している。

葉っぱは夜飛ぶのが大好きで、空の星を見あげたり、人間が住む地上の

家や村の灯りを眺めている。そして、その光景にうれしくなって歌を歌っている。さらに、野原をゆっくり進みながら、そこに落ちている枯れ葉や小枝について、「これが枯れ葉？ついこの間まできれいな緑色だったのに！これは枯れ枝じゃない。この木に花が咲いていたし、きれいなつぼみをもっていた」と言い、特別なもののように思っている。そして、思えばいろいろなものを見たり聞いた、ずいぶん長生きしたものだという気持ちにひたっている。

さて秋が来て、刈りとりの終わった畑を飛んでいるときに、あの少年がたき火をしてジャガイモを焼いているのに気づき、その灰の上に落ちていく。葉っぱはくすぶり始めるが、ふしぎなことに「これでいい」と思い、少年に銀は見つかったかとたずねる。少年は雲母が光る石をとりだして見せている。葉っぱがとても美しいというと、少年は1年の冒険の旅の話をしてほしいという。葉っぱはもうすぐ燃えてしまうほんの短い時間のなかで、「飛んでいた鳥のこと、元気に遊んでいた子どもたち、美しさはうつろいやすいこと、雪の下でじっと春を待つ花、自分に不安が消えたこと」などを話している。

ほとんど聞こえないほどの声ではあったが、少年はたき火を見ながらじっと耳をかたむけ、わかっている。そして、葉っぱが燃えつきても少年は見続け、満ち足りた気持ちになっている。作者は最後に、わけはわからないが、だれでもたき火のそばにいと、幸せになるものだと言っている。

以上がこの絵本のストーリーである。ここでまず考えたいのは、「葉っぱのフレディ」で木から離れる引越しが死であったのに対して、この絵本では誕生を意味していることである。ライフのスタートは、いうまでもないが、誕生である。それではこの場合、はたして誕生といえるであろうか。春になって葉がでるときを誕生というのが一般的であるが、紅葉した葉が木を離れるときをスタートにしている。

少年に会ったとき、彼はハンマーを誕生日にもらったというが、葉っぱ

は誕生日を知らず、それはなにかと質問している。少年は、年をとるとお祝いにもらえるプレゼントのようなものだと答えている。人間の子どもは理解できるが、葉っぱには納得できないであろう。

これについては、つぎのように理解したらどうであろうか。春に生まれて成長し、秋を迎える頃になって葉っぱは自己に目ざめ、自分の将来や望みといった目標を自覚的にもち、「冒険の旅」に出ることを具体的に考えるようになる。すでに成長して大きくなっているが、真に自己に目ざめ、自分のあるべき姿をイメージできたときが、ライフの本当の出発点であるというのが、作者の主張なのである。

人間の場合、身体をもつものとして母から生まれたときを誕生としているが、木つまり母に付いているかぎり、葉っぱは木に依存しており、自立しているとは決していえない。要するに、自己に目ざめ、自己の自立性を求めて木を飛びたとうとするときが、本当のライフのスタートなのである。

つぎに、ライフは変化していくということである。フレディの場合、春から夏へ、そして秋へと葉っぱは変わっていき、冬に引越しになるとされているが、カエデの場合、秋がスタートであり、翌年の秋までの1年間の「ライフ・コース」（人生の進路）の変化が示されている。この絵本は秋を基点としており、冬と春を経過したあとの夏の記述は少ないが、やはり「人生四季論」なのである。

金色がベースで片方のふちがピンク色の大きな葉っぱは冒険の旅に出るが、その間自分が変化していくことを認識している。金色とピンクであったのが、旅に出たあと黒っぽくなり、ショックを受けている。

その後、冬になって、白い線の模様があちこちにできて美しくなると、再び自信を回復している。さらに、春になってその線が細い灰色のクモの巣のように変わっている。季節の経過とともに葉の状態が明らかに変わっているが、その姿を自身で自己肯定できるようになる。黒っぽくなったときには容姿の変化に抵抗感をもったが、その後これを認められるようになっている。つまり、美しさはうつろいやすいことへの自覚である。

もうひとつの変化は、いのちが尽きる頃には、飛び始めたときの単なる好奇心がいつのまにかそれを越えて、なにごとにも冷静に観察できるようになる。最終的には枯れ葉や小枝などもしっかりと見て、そのなかで「いろいろなものを見たし聞いたし、そして、ずいぶん長生きもした」と思うようになっていく。たき火をする少年のところに戻り、灰の上に落ちていく自分を「これでいい」と思い、少年に対して「不安」がなくなったと告げている。旅のいろいろな経験を通じて、葉っぱの心模様が大きく変わったことがわかる。

第3に指摘したいのは、人生は「冒険の旅」であるということである。木から離れて遠く飛んでいき、いろいろ見たり聞いたりしたいと望んでいた。そして、1年間の旅でその目標を実現できたということであろう。最後は不安もなく、満足感を感じている。したがって、冒険の旅という「人生の目標」(ライフ・ゴール、ライフ・ビジョン)をもち、それをほぼ実現できた葉っぱは幸せであった。

とはいえ、葉っぱの冒険の旅は、自分が美しいと評価されたり、子どもが遊んでいる姿や夜空など、いいことばかりではない。期待しないことが発生したり、いのちの危険にさらされるような「リスク」にも見舞われている。木から飛びだしたものの、まもなく大きな石の間に落ちてしまう。

少年がいなければどうなっていたであろうか。そこで挫折していたかもしれない。その後も畑の栄養、押し葉、スズメの巣の材料にされようとするなど、リスクはつねにつきまとっていた。そのようななかでそれらをすべて克服できたので、再び少年に会うことになる。さらに、いろいろな経験を積みかさねて精神的にも確実に成長することができたのである。

いずれにせよ、ライフを冒険の旅にたとえる見方は、多くの人がとが納得できるものであろう。好奇心のあることに向かって進むのは大切である。葉っぱの場合それは遠くに旅をするということであるが、目指すものはなんでもいい。リスクはあるがそれをおそれてはならない。リスクがある反面で得ることは多い。このように、ライフには、目指す目標に向かって挑

戦することの大切さがあることをこの絵本は教えてくれる。

もうひとつ考えておきたいのは、ライフにおける友人の意味である。前出のフレディにとって、おおぜいたた友人のなかで、とくにダニエルとの関係は重要であった。ダニエルはフレディの親友であり、それ以上にむしろメンター (mentor) のような存在であり、ものをよく知っているので、日常的にいろいろと教えている。

カエデの葉っぱと少年も同じように親友同士である。しかし、両者の関係性はフレディとダニエルのそれとは異なり、ほぼ対等である。しかも、日常的に話しあえる環境にはなく1回だけの出会いで親しくなり、その後も友情を忘れていない。そして、1年後の再会は出会いのときと同じ別れの日になっているが、両者は満足感のなかにいる。おそらく、これも友情のひとつのかたちとして確実にあろう。

3. ライフとキャリアを考えるための5冊の絵本

- ① 『ねこのくにのおきゃくさま』〔スリランカ〕
- ② 『おばけリンゴ』〔ドイツ〕
- ③ 『ルピナスさん』〔アメリカ〕
- ④ 『おおきな木』〔アメリカ〕
- ⑤ 『ティリーのねがい』〔イギリス〕

(1) 『ねこのくにのおきゃくさま』におけるライフと仕事

『ねこのくにのおきゃくさま』(*Strange Visitors to the Cat Country*、1996、松岡享子訳、福音館書店、1996年)は、シビル・ウェッタシンハ(Sybil Wettasinghe)の作である。作者はスリランカの代表的な絵本作家であり、訳者は松岡享子である。

絵は独特なものであり、どちらかといえばおもしろく描かれているが、ヨーロッパ風の感じはない。働き者の「ネコの国」を訪れたふたりの客人

は、人間の生活や人生のなかで、仕事や働くことだけでなく、楽しむことの大切さを教えている。ネコの国の住人たちはこの客人のとりこになるものの、その正体がネズミであるということがわかって、よだれをたらしてしまうというお話である。

ネコの国は海に浮かぶ島にあり、皆がみな働き者であった。生活に必要なものは自給自足、地産地消であり、なにに不自由のない暮らしをしている。それでも非常に幸せというわけではなく、なにか不足するものがあった。つまり、その国には仕事中心の文化が形成されており、住人たちは働くことは知っているが、楽しむことを知らなかったのである。

ある日、この国に見たことのないふたりが上陸してくる。ふたりは顔に大きな面とすてきな衣装を身につけており、だれであるかはまったくわからない。そして、丸い筒のようなものを持っていた。ふたりはネコたちにていねいに「おじぎ」をするが、ネコたちは見たことがなかったので、はじめのうちはこわがって逃げようとする。

ところが、ふたりのうちのひとりが筒のようなものをたたき、もうひとりがそれに合わせてしなやかに体を揺らし始めたので、ネコたちは足をとめてすっかりみとれてしまう。そして、時がたつにつれ、非常にいい気持ちになっていく。

ふたりの客人はこれは「音楽」と「踊り」であると説明するが、見るほどにネコたちはその音楽と踊りが大好きになり、そのとりこになってしまう。しかし、ふたりは決してお面をはずさなかったので、客人がどんな顔をしているかはわからない。

やがて、このうわさはネコの国の王様の知るところとなり、御殿で音楽と踊りをお見せする機会がくる。王様とお妃はすばらしい音楽と踊りに喜び、こんな楽しい思いをこれまでにしたことがないと言う。踊りが終わったあと、王様は客人にお面をとることを求めるが、ふたりはお面をとると自分たちのいのちがあぶなくなると言って、それをことわる。

王様はこれからも長い友人としてつきあってほしいと願っているので、ぜひお面をとってほしいという。ふたりは自分たちのいのちを守ってくれることを条件にして、お面をはずすことにする。王様はたしかにいのちを守ると約束する。

お面をとると、2匹のまるまる肥えたネズミがあらわれる。いうまでもないが、たちまち御殿のなかは大さわぎとなり、王様もネコたちだれもがよだれをたらし始める。しかし、落ち着きをとり戻した王様は、音楽と踊りを運んできてくれた勇氣あるネズミのいのちを守るよう厳命する。そのうえに、客人たちにたくさんのプレゼントを贈っている。

それから数日の間、ネズミはネコの国にとどまり、ネコの子どもたちにも音楽と踊りを教え、子どもたちはそれができるようになる。ついにお別れのときがきて、ネコの国の住人たちは船が見えなくなるまで手を振って見送っている。上陸したときは「見たことのないヒト」であったが、別れのときは「友人」になっている。客人はいなくなったけれど、ネコの国の住人は働くこととともに、楽しむことを知ったので、とても幸せになっている。

以上がこの絵本の主なストーリーである。お面をつけていたとはいえ、ネズミがネコの国を訪問するということ自体「奇想」であるが、さらに、アウトサイダー（よそ者）のネズミがネコに楽しむことを教えて、豊かな生活を送れるようにしている。

絵を見ると、ネコの国は緑に恵まれた環境にあり、それは作者自身の国であるスリランカをイメージしているのかもしれない。このような環境のなかで、ネコたちは比較的小さな家に住み、王様の御殿のほかには学校が描かれている。

生活に必要なものについては、島のなかでは自給自足、地産地消であり、分業体制が確立しているようである。しかも、機械はなく、ほとんどが手作業（ハンド・メイド）である。具体的には、畑をつくる、野菜・果物を

とる、糸・布をつくる、ろくろをまわす、ホーキをつくる、マキを割るなどの種々の仕事がかかれている。ただし、それらの仕事にそれぞれの住人が専念しているが、仕事の関係性は示されておらず、物々交換の場や市場は描かれていない。

こうしたなかでみな「働き者」であり、仕事をしている顔は男も女もまじめそのものである。そして、なに不自由のない生活を送っており、そこでは働くことでかなりの程度まで幸せな気持ちを得られている。ただ、非常に幸せだとはいえないのかもしれない。

ネコの国の住人たちにはなにかが足らなかったわけである。本文では、働いて仕事を行うことは知っているが、楽しむことを知らなかったとしている。このような「ライフ＝仕事」のなかにお面をかぶった客人が登場し、音楽と踊りが持ちこまれることになって、ネコの国はきわめて大きなインパクトを受ける。

ネコたちははじめのうちはお面の客人をこわがっていたが、しだいにかれらの音楽と踊りに魅了されていく。ふたりのまわりに多くのネコが集まっているし、王様の御殿に招かれたときの様子もこれと同じである。そして、子どもたちはすぐに楽しくなり、自然に踊りだしている。

その結果、ネコの国の住人は働くことのほかに、楽しむこと（文化）を知るようになる。つまり、かれらのライフには、仕事とらんで音楽と踊りによる楽しみが加わり、「ライフ＝仕事（働くこと）＋楽しみ」の等式が成り立ったことになる。われわれの生活や人生にとって仕事は重要であるが、同時に楽しむことも大きな要素であることをこの絵本は指し示している。

働くこと、仕事をするだけで「人生の目標」（ライフ・ゴール、ライフ・ビジョン）ではないという単純な命題が、この絵本の中心にある。つまり、ライフには仕事以外に楽しみというファクターが重要であり、そのもっとも原型となるのが音楽と踊りなのである。現代におきかえると、楽しみの内実はこのふたつを含む多様なものが考えられるが、ライフにとってもっ

ともベースになるものとして、このふたつをあげている。

ところで、変装していたとはいえ、食べられるリスクをおかして、ネズミがなぜネコの国に来たのかは不明である。ある日、海のむこうから見たことのない舟が現われてネコの国の岸辺に到着し、大きなお面とすてきな衣装を身につけたふたりが出てきて、ネコの国の人たちに「ていねいに」おじぎをしている。見知らぬ不思議な姿なので、ネコたちはこわがっている。しかし、なにやらおもしろいことが始まったので、足をとめ、徐々にいい気持ちになったと書いている。

漂流してきたようではない。しかし、ネズミの国の王様から公式的に派遣されてもいない。ネコはネズミの最大の敵であり、ネコの国に入ることは最大のリスクであって、当然国どうしの交流はないはずである。

ネズミの国には楽しむ文化がすでにつくりあげられていて、音楽や踊りを楽しんでいたのかもしれない。彼らの最大の敵に楽しむ文化がないことを知っているネズミのグループが、それを教えるために、命を失うかもしれないリスクをおかしてネコの国を訪問したのであろう。そして、みごとそれに成功している。ここでは、ネズミの「勇気に乾杯」ということになるのであろうか。

ついでに言えば、ネコの国の王様がネズミとの約束を守り、ネズミのいのちをとらなかつたことで、この話は救われる。どんな場合でも約束を守ること、守ろうとすることは、人間が仕事を行い、生きるためには大切なのである。そして、王様が約束を破つたらという仮定は、この絵本には不要である。

(2) 『おばけリンゴ』におけるライフと仕事の一体化

ヤーノシュ (Janosch) 作の『おばけリンゴ』 (*Das Apfelmännchen*, 1965、矢川澄子訳、福音館書店、1969年) は、原題をそのまま訳すと「リンゴ男」であり、リンゴの木に実をつけさせることに懸命になったひとりの男の話である。この絵本を見ると、男はリンゴの実がならない木になん

とかして実らせようとしているが、それが日々の生活であるとともに、仕事そのものでもあり、生活と仕事が混然一体になっている。絵はきわめて素朴に描かれている。

たしかに、実はおばけのような巨大なリングであり、本のタイトルを「おばけリング」にしたことはまちがいないといってよい。しかし、実のならない木にリングを実らせようとした男の執念でいえば、まさに「リング男」なのである。以下はこの絵本のあらすじである。

むかし、あるところにワルターという貧乏な男がいた。一本のリングの木を持っており、つやつやした緑色の葉、幹もしっかり育っていた。しかし、これまでに実をつけたことがなく、花さえも咲いたことがなかった。

春になると隣家のリングの木はみごとに花が咲き始めるのに、ワルターの木には花はなく、彼はとても悲しくなっている。夏がすぎて秋になると、隣では実がすずなりにつき、カゴ一杯のリングを背中にせおう姿が見られる。ワルターはすっかり悲しくなっていた。夜ベッドのなかでいろいろ考えている。そして、本当に心をこめて「ひとつでいいから、私の木にもリングがなりますように。立派なものでなくていいから」と祈っている。

そして、ついにこの祈りがかなえられる。リングの木に一輪の白い花が咲いたのである。うれしさのあまり木のまわりを飛びまわっている。それからというもの、朝から晩まで花の番をし、花を雨や風、陽ざしなどから守るために、いろいろな努力と工夫を行っている。それは涙ぐましいものであった。

夏になって花は小さな実になる。彼はうれしくてたまらなかった。気分が良くなり、会う人びとに自分のほうからきげんよく語りかけている。「ほんとに、すばらしい毎日でした」と作者は書いている。やがて秋がきてリングは大きくなる。とり入れの時期がきてもとめることはせず、そのままにしている。しかし、それが大きくなるにつれ、他人にとられるのではないかと心配になり、通行人も信用できなくなっている。

ところで、いよいよ収穫して町の市場に持っていくことになった。しかし、あまりにも大きくなりすぎて、駅の入り口を通ることができず、車で運ぶことがむずかしいことがわかり、彼はリングをせおって歩いていく。あまりの重さに体はガタガタになるが、高い値段で売れることを期待してがんばっている。

市場につくとおおぜいの人びとが集まってきて、そんなに大きいのはリングではないとか、どうして自分で食べないのかなどとからかわれてしまう。そして、結局リングは売れず、人びとは去ってしまい、彼はしょんぼりリングのそばに立っていた。しかたなく、重いリングを再びかついで家に帰ることにした。それからは朝も昼もリングの番をするようになり、リングができるまでの喜びは一転して、いまではなさけない気分になっている。

ワルターは死んでしまいたいと思うほどになっているが、ここで事態が一変する事件が発生する。おそろしい8本足の龍が彼の住んでいる国をおびやかし、農作物などなんでも食い荒らしていた。王様からこのリングを龍にさし出せとの命令がでる。これでリングの番をしなくてもよくなるので、彼は安心してほっとしている。

大食いの龍はさっそくこのリングを食べ始めるが、あわてていたの、どにリングがひっかかり、息がつまってそれっきり死んでしまう。そこで国が救われ、貧乏な彼の苦労や心配も一気に消失する。そのち彼はもとの元気を回復する。そして、いまではベッドに入ると、この事件を思い出しながら、つぎのように祈っている。「ふたつでいいから、リングがなりますように。小さなリングでいいのです。カゴに入るくらいのがほしいのです。」

以上がこの絵本のストーリーである。ワルターの仕事や職業ははっきりしていない。絵では彼の家には畑がなく、隣家のリング畑が描かれているだけである。農業をやっているようでもないが、貧しいとはいえ、生活を維持しているので、おそらく農業を行っていたと思われる。みすばらしい

衣服やベッド、小さな家など、貧乏であることはわかる。

実がならないリングをなるようにすることが、彼の日々の生活の中心にあり、それが仕事になっている。その執着ぶりは並みたいていではない。木には病気もなく問題はなさそうであるが、花は咲かず実がならないことを嘆いて、なんとかしようとしている。そして、心をこめて祈っている。

この祈りは通じた。思いが強いと願いはかなうのであろうか。あきらめてしまうことは簡単であるが、執着して思っていれば、目標は実現する可能性がでてくるとみたほうがよいであろう。

祈りがかなって花が咲き、実がなり始めると、涙ぐましい努力をしてリングに向きあっている。まさにリング男そのものである。そして、日々の生活は満足感にみちあふれている。しかし、祈っているときは「立派でなくてもよい」としながら、とてつもないほどの大きさにしようとしている。実がなくなってしまったら心が変わり、立派なものにしたいと思うようになったのであろうか。

興味深いのは、それまで通行人にきげんよく語りかけていたのに、大きくなくなってしまったら、彼らにとられてしまうのではないかと心配していることである。さらに、おばけリングにしたことで持ち運びが困難になるだけでなく、実際に市場で売れなかった。

実がなくてほしいと思っていたときと実際になったときとでは、男の気持ちは変わっている。なったときにはもう少し大きくしようとしているが、どこまで大きくするかについては、ある種の目安がないと、どこまでも大きくしたくなる。それは小さな企業でスタートした経営者が、成功してどこまでも成長を求めてしまうのに似ている。

リング男の場合、この死にたくなるような苦境を、龍の登場で乗り切ることができた。これはまったくの幸運である。人生にはこのような偶然があるが、そのような幸運をいつも期待することはできない。むしろ、このような場合には、リングの番をしてリングを守るという考えを転換すると、苦境から逃れることもできる。

また、祈りがかなってできたリングではあるが、そのリングを自分のものにしないという選択もあるだろう。たとえば、王様にプレゼントするとか、周囲の人びとを集めて皆で分けあうこともできる。ただ、やっとなのでできたリングであるからこそ、自分の“もの”という意識が強かったのであろう。そして、貧乏なので、おばけリングが高く売れることを望んでいたと思われる。その意味では、発想の転換はむずかしかった。

また、ワルターの行動のなかで注目すべきは、対人関係の変化である。隣家のリング畑にたくさんの花が咲き実をつけているが、自分の木がそうではないので、寂しくなるとともに、隣家をうらやましく思っている。しかし、花が咲き始めるとうれしくなり、うれしくなって通行人にも愛想が良くなっている。そして、大きくなりすぎたときには、今度は他人にとられるのではないかと心配している。さらに、龍にさしだすことで不安は消失する。大きくなりすぎたリングの番をしなくていいので、再び元気をとり戻している。

このように、こころの変化がその人間の対人関係を左右している。“さびしい”、“うらやましい”、“うれしい”、“不安や心配である”といった感情が、他人との人間関係に大きな影響を及ぼしていることがわかる。「職場の人間関係がよくない。あの人がいるから」などとよく言われるが、人間関係の悪さの要因は、他人ではなく、むしろ自分自身のこころとその変化にある。

さて、話の終りに、ベッドのなかでもう一度リングが来年もなることを祈っている。ひとつではなく、ふたつなってほしい、カゴに入る小さなリングでいいとしている。リングがなってほしいという思いは変わっていない。あれほど心が大きく揺さぶられたはずなのに、こりた感じはなく、やはりリングがなってほしいと願っている。大変な経験をする、それまでのことを断念するとか、ほかのことを求めることが多いが、ワルターは依然としてリングにこだわっている。彼はここでもリング男である。

ただし、具体的な目標の設定は明らかに変化している。まず、リングの

数がひとつからふたつになっている。そして、前の収穫で立派でなくいいと思っていたのが、なってみると「目標の切りかえ」を行って大きくしすぎ、持ち運びや販売が困難だったことから、カゴに入る小さなリングをつくりたいと修正している。

ひとつからふたつになった理由は必ずしもはっきりしていない。単純に前よりも多くなってほしいと考えているのか、ふたつあればなにか起きたときにリスクを回避できると思ったのか、定かではない。そして、自家消費であれ、再び市場に売りに出すにしろ、もう少し多くを望んでもいいのではないかと思ってしまう。また、前の収穫のときに、隣家の人がカゴを一杯にして背中にせおっている姿を彼は見ているが、そのような姿を彼は望んでいない。

そして、小さなリングでカゴに入るというもうひとつの目標は、一連の経過からでてきた結論である。すでに述べたように、カゴに入らないほどの大きなリングに育てたために、持ち運びがむずかしく、売ることができなかった。それは彼にとっては“コリゴリ”というべき体験になってしまったのである。したがって、この目標の変化はしごく納得できるものである。

いずれにせよ、リングをつくるという彼の生活と仕事はその後でも維持される。リングに思いをこめて日々生活し、それが仕事でもあることを続けていくであろう。しかし、具体的な目標についてはその時々修正されたり、追加されたりして変化する。おそらく人間はそのように生きていくのであろう。

(3) 目標がライフにとって大切であることを主張した『ルピナスさん』

バーバラ・クーニー (Barbara Cooney) 作の『ルピナスさん』(*Miss Rumphius*, 1982、掛川恭子訳、ほるぷ出版、1987年) は、ライフにとって仕事や働くこと以外に、もっと大切なものがあることを明らかにしている。それによると、人間は「人生の目標」というべきものをしっかりもち、それを意識して生きるという主張であり、これが絵本の根底に流れている。

そして、目標の実現にむかって生きるアリスという女性のライフを描いている。話の大筋は以下のようなものである。

アリスは子どもの頃、祖父たちと海辺の町に住んでおり、家はポーチから港や大きな船のマストが見える場所にあった。世界の各地を歩いてアメリカに渡ってきた祖父は、家にある仕事場で船のへさきに飾る船首像をほったり、店舗の看板をつくったりしている。そして、帆船や遠い国ぐにの絵を描いている。

夜の自由な時間になると、祖父はアリスに自分が旅してきた遠い国ぐにのことを話している。話が終わると、彼女は大きくなったら祖父と同じように遠い国を旅し、そのあと年をとったら海辺の町に住むことを約束している。祖父はその答えにうなずきながら、さらにもうひとつのライフ・ゴールをアリスに伝えている。祖父はいう。「世のなかを、もっと美しくするために、なにかをしてほしい」と。アリスはなにをすればよいかはわからなかったが、「いいわ」と返事をしている。

そうしてアリスは成長し、祖父との約束にとりかかる。まず、海辺から離れた町へ移り、その町の図書館で働く。この図書館には遠い国ぐにのことを書いた本がたくさんあり、彼女はそこでいろいろなことを知ることになる。

仕事以外の自由な時間には、この町の公園にある温室を見学している。真冬でも温室は暖かさにつつまれており、ジャスミンの甘い香りが漂っていた。それは、南の島にいるような感じであった。この体験から、アリスは本物の南の島に行く決心をする。

そして、実際に彼女は南の島できれいな貝がらを拾ったり、その島の村長に会って歓待を受けている。村長からもらったゴクラクチョウの絵が描かれた美しい真珠貝には、「いつまでも忘れません」とあり、彼女は感激している。そのあと、一年中雪のとけない高山やジャングルを経て砂漠に入るなどの旅をして、いつまでも忘れられない人びとと出会っている。

けれども、帰ることを忘れてしまうほど美しい国にたどりつき、ラクダから降りるときに背中をいためてしまう。これをきっかけに、アリスは遠い国ぐにを見ろという目的はほぼ達成できたとして、つぎのライフ・ゴールである海辺の町で暮らすことにする。家は丘の上にあって一日中海と太陽を見ることができ、そして、岩がゴロゴロある家のまわりを耕して、花の種をまいている。それは、彼女にとってもすてきな暮らしであった。

しかし、彼女にはもうひとつの目標があり、海をながめながら、「世のなかをもっと美しくするために、なにをすればよいか」を考えている。翌年の春には傷めた背中が悪化してきびしいベッド生活が続くが、前の年にまいた花の種が芽をだし、青や紫やピンクの花が咲いているのをベッドからうれしそうに見ている。この花こそ「ルピナス」なのである。

一年後の春、健康を回復した彼女は散歩ができるほどになり、かなり遠くにあるむこうの丘にまで足を伸ばしている。するとそこには、自宅の庭の種が運んだルピナスの花が咲きみだれていた。これを見るや、もうひとつのライフ・ゴールが彼女の頭に浮かんでくる。

すぐにルピナスの種を大量に購入し、夏には住んでいる地域をくまなく歩いて種をまいている。彼女を「頭のおかしいおばあさん」という人もいたが、つぎの春には町全体が美しいルピナスであふれている。これにより、祖父との3番目の約束を果たし、彼女はこの海辺の町で「ルピナスさん」と呼ばれるようになる。

以上がこの絵本のストーリーである。この話は「ルピナスさん」が大おばさんという女の子の語りというかたちで書かれているが、アリスが子どものときに祖父から教えてもらったのとまったく同じライフ・ゴールを教えこまれている。そして、若き日のアリスと同じように、3番目の目標はまだわかっていないとしている。

この絵本では、ライフにとって目標が大切であり、それを意識しながら生きていくべきであるという。この目標づくりにあたって注目したいのは、

まず「メンター」の存在である。子どもがライフ・ゴールを見つけることはむずかしい。小さな子どもには具体的なライフ・ゴールらしいものはあり、“花屋さんになりたい”とか“運転手さんになりたい”など、子どもに人気の仕事もあるが、子どもにとってライフ・ゴールはあいまいであるのが一般的である。とくに3番目のような抽象的なゴールについては無縁である。

子どもには父母を中心とする周辺の人びとがメンターである。学校生活が入ってくると教師が重要なメンターになるが、父母を中心とする人びとの役割は大きい。ルピナスさんの場合、決定的に重要なのは「祖父」である。両親の存在には一切触れられていない。夜、彼女をひざにのせて遠い国の話をしている居間には、祖父が描いた南の国の海辺の絵がかけられているとともに、カーテンの陰に祖母らしい女性が立っている。つまり、祖父以外の家族ははっきりしておらず、登場していない。

子どもにとって身近な周辺の大人がメンターであり、この絵本では、ライフ・ゴールの決定に祖父がきわめて大きな役割を果たし、子どもは祖父との約束を守り、それを目指して生きていくことになる。そして、アリスが大おばさんという女の子も同じ道を歩むと思われる。

ライフ・ゴールでつぎに考えておきたいのは、ゴールには具体的なものと抽象的なもののふたつのタイプがあることである。遠くの国ぐにへ行くこと、海辺の町に住むことは前者であり、子どもにわかりやすい。これに対して、「世のなかをもっと美しくする」ためになにをすればよいかは、具体的ではなく抽象的である。大人になって、かなりの経験をつんだり、思考を重ねることで得られるものかもしれない。しかし、なにをすればよいのかは、年をとってもわからないことも当然ある。そして、実際には、それが本当のところであろう。

自分が種をまいたルピナスが予想しなかったところで咲いているのを見て、種をあちこちにまくことを思いついた。ベッド生活の中でいろいろ考えていたものの、アイデアはでなかったが、少し遠くまで散歩したことで、抽象的な目標は具体的なものに転換し、それが実現されている。家のまわ

りにルピナスの種をまいて美しくしようと思ったことと、健康の回復したことが結びつき、それがきっかけとなって、地域全体を美しくしようという具体的な目標が生みだされている。

第3に注目すべきは、仕事を行うことと、そこから経済的報酬を受けとることについて、ライフの中での位置がどうしても低く見えることである。この絵本でみるかぎり、彼女は海辺から離れた町の図書館で働いているだけであり、ほかの仕事をしていた感じはほとんどみられない。

また、図書館の仕事で巨額な報酬を得たと考えることはできない。そうであるなら、遠い国ぐにへの旅行や海辺の町の家を購入にかかった資金は、どのようにしたのであろうかと思ってしまう。さらに、彼女が経済的に余裕のある階層の人なのかと考えてしまうかもしれない。

しかし、それはおそらくちがっていよう。この絵本で作者が主張したかったのは、たしかに仕事も大切であるが、ライフには仕事以上にもっと大切なものがあり、それを求めて人間は生きるのだということである。

遠くの国へ行くことと海辺の町に住むことは、アリスという特定の人間にのみ重要であり、その人が自分で決める個人の目標であるが、「世のなかをもっと美しくする」には、一個人の目標であるとともに、それを越えた社会の改善・改革を目指すものが含まれている。一般に仕事を個人の目標の中心にしていることが多いが、それ以上に各人それぞれが独自の個人目標を意識的にもつことが大切であると作者は主張していると考ええる。アリスの場合、ライフ・ゴールは祖父の影響を受けているが、彼女が決めたこのライフ・ゴールのなかで仕事の位置は低かったということであろう。

自分でよく考えて、ライフ・ゴールとして仕事が大切であるということになれば、その仕事はまさにやりたいと思うことを行う「志事」になる。そして、ライフ・ゴールを明確にもってそれにむかう行動は、すべて「志事」になるといってよい。人間にとって仕事は大切であるが、ライフ・ゴールを見つけて生きることのほうがもっと大切なのである。ただし、見つける作業は意識しないと容易ではない。

(4) 『おおきな木』 にでてくる「ぼうや」のライフ

シェル・シルヴァスタイン (Shel Silverstein) の『おおきな木』 (*The Giving Tree*, 1964, 本田錦一郎訳、篠崎書林、1976年) は、大きな木とひとりの人間の交流を描いている。作品のなかの絵は色がつけられておらず、骨太の線書きである。登場するのは木とひとりの人間だけであり、シンプルそのものである。しかし、それだけに印象は強い。

この絵本の主役は英文タイトル *The Giving Tree* の「木」である。対象となる人間を「ぼうや」と呼ぶこの木は「大きな木」と記されているが、どんなときにも対象である人間に「愛を与える木」である。それは、小さな子どもを愛し、どこまでも許せる母親の愛をイメージさせており、すべてを包みこむ大きな愛、崇高な愛である。また、その活動は自己を捨てて他者に奉仕する「利他主義」的で、自己犠牲的にもみえてくる。つまり、その木は社会的にみると、とても立派な存在なのである。

この絵本はこの立派な存在がテーマになっているが、あわせて注目すべきは、この存在の対象となった人間である。以下ではまず、主なストーリーを要約していこう。

「愛を与える木」はリンゴの木で、“ぼうや”というかわいいちびっ子と仲良しの関係にある。ぼうやは毎日やってきては、いろいろな遊びなどを行っている。それは、木を集める、かんむりをつくって頭にかぶり森の王様になる、木の幹によじのぼる、枝にぶらさがる、リンゴを食べる、木とかくれんぼうをする、木陰で昼寝をする、などである。

ぼうやはその木が大好きであった。そして、木はぼうやにいろいろ与えることで、うれしい気持ちになっている。しかし、時が流れてちびっ子は大きくなり、青年になっている。その間、ぼうやは来なくなり、木は一人ぼっちであった。

ところがある日、その子がやってきたので、木はちびっ子のときにしたことをまたやって、楽しくなってほしいと言う。それに対して、自分も

う大きくなったので、ちびっ子のときと同じことはできないと切り返している。そして、自分は買物がしたいがお金がない、おこづかいがほしいと言う。

木は自分にはお金はなく、持っているのは葉っぱとリンゴだけであり、リンゴを町で売ればお金が得られ、楽しくできると答える。青年は木のほってリンゴをもぎとり、すべてを持ちかえている。木はそれでうれしかったのである。

それから長い間、その子は木のところに来なかった。木は悲しくなっていた。そんなある日、その子がひょっこりやってくる。木はうれしくなると、ちびっ子のときのように遊ぶよう催促している。すると、木登りするヒマはなく、大人になったので、結婚して子どもがほしい。そのために家がどうしても必要だと返事している。

木は家をあげることはできないが、自分の枝を切れれば家を建てることができ、そうすれば楽しくなるだろうと言う。そこで、男は枝を切り払い、持ちかえてしまう。木はそれでうれしかったのである。

そののち、男は長い間、木のところに来なかったが、ひょっこり戻ってくる。木は枝はなくなったが、ここで遊んでほしいと言うと、男は年をとって悲しいことばかりで、もう遊ぶ気持ちにはなれないと返す。そして、いまは舟に乗って遠く離れたところに行きたい、舟がほしいと要求する。それに対して、木は私の幹を切り倒して舟をつくれれば、遠くに行けて楽しくなるだろうと言っている。この男は幹を切り倒して舟をつくり、行ってしまふ。木はそれでうれしかったのである。

長い年月がたって、男は高齢の老人になって戻ってくる。木は自分にはなにもあげるものはないという。それに対して老人は、木がかつてのぼうやのときの状態であっても、いまでは歯が弱ってリンゴはかじれないし、枝にぶら下がることもできない、疲れて木登りもできないと応えている。

木はいまや古ぼけた株でしかなく、ヨボヨボの老人のほうも座って休む場所があれば、それで十分であると言う。そこで、木は自分の切り株で休

むように言っている。老人はそれに従い、木はそれでうれしかったのである。

以上のように、このリンゴの木は相手の言うことをどこまでも許容できる愛の持ち主であり、社会的に見ると、いわゆる立派な存在である。しかし、幹が切り倒され、舟にされた後でも、木はそれでうれしかったと言っているが、作者はそのあとに「だけど、それはほんとなかな」と加えている。この一文はなにを意味しているのであろうか。

幹がなくなったり、切り株になったところで、自分のあたえる愛が正しかったとしても、もはや自分にはなにもあげるものがなくなってしまっていることに気づいたはずである。つまり、自分が行ってきたことはよいことであるが、結果として無力な存在になってしまった自分を認めざるをえなかったと考えられる。

それは、愛を与え続けることのある種の限界を示している。枝があるまでは自分のところで遊んでほしいと言えたが、幹がなくなったところで木にはある種の無力感が生まれていたのであろう。ヨボヨボの老人の前で、自分には古ぼけた株しか残っていないと述べた立派な木の発言には、この無力感がおそらくある。

しかし、ここでひとつの救いがある。ヨボヨボの老人には、切り株で十分であるということである。この発言で大きな木の心は救済されることになったと考えられる。そして、最後まで愛を与えることを貫くことができたのである。

さて、大きな木の相手となった“ぼうや”について考えてみよう。この絵本をみると、ひとりの人間が子どもから成長して大人になり、さらに老いていくという「ライフ・コース」(人生の進路)を理解することができる。

そして、ライフ・コースにはいくつかのステージ(局面)があることが想定されている。第1はまさにぼうやである「少年のステージ」である。そして、第2は「青年のステージ」、第3はいわゆる仕事を行う「大人のステージ」、第4は「定年後のステージ」である。さらに、第5は「老齢のステー

ジ」である。

当然のことであるが、少年のステージは、すでに述べたように、遊びなどの活動が中心であり、他のステージと比べ、かなりのボリュームをさいて絵が描かれている。ぼうやが本当に大きな木が好きであり、楽しかった様子が示されている。

つぎの青年のステージになると、青年は木よりも社会に関心が移っていくとともに、いろいろなものが欲しくなる。しかし、青年には、そのための資力が備わっていない。このような状況をこの絵本では見ることができる。

さらに大人のステージになると、彼は仕事もち、働くようになる。そして、恋人がいて結婚したくなってくる。つまり、一家をかまえる気持ちが生まれ、家がほしいという欲求が強まる。その後、仕事を続け、子どもや家族ができ、社会にも貢献していく。

そして、定年後のステージを迎える。作中の悲しいことばかりであったという言葉から考えると、男が“ハッピー・リタイアメント（幸せな退職）”ではなかったようである。そして、舟をつくって遠くへ行きたいと願っており、「逃避の欲求」が強まっている。「キャリア・サティスファクション」（自分のキャリア（職業生活）をふりかえって、良かったと思う満足度の程度）は極端に低く、それに加えて家庭生活にも不満が高まっていたのであろう。そうでなければ、これほど強い逃避の欲求はでてこなかったはずである。

最後は老齢のステージである。逃避の生活のなかで、それまでのステージで傷ついた心がいやされたのであろう。そして、それがかなりできたので、気力や体力が低下してはいるものの、ぼうやのときに遊んだ大好きな木のもとに戻ってくる。それは、「回帰の欲求」であろうか。

すでに切り株だけの姿になってしまった大きな木には、座れるだけのものしか残っていなかったが、年老いた老人にはそれで十分であり、かくして、木は最後まで愛を与えることができたのである。そして、切り株に座ることで、両者ともまさに「安心立命の境地」になっている。

ぼうやは以上のようなライフ・コースを歩んでいる。仕事やキャリアの

時期である「大人のステージ」では大変なことがあったであろうが、このように歩む人びとは少なくない。そして、ほうやのライフや活動から、もうひとつの注目点が浮かびあがる。ほうやは大きな木から「愛を与えられる人間」であり、木に愛を求めている。そして、ライフのそれぞれのステージで、彼が求めたものは遊びなどからお金、家、舟、さらに静かに座って休めるイスへと変化している。

全体的にみて彼が求めたものは、モノやカネといった即物的な感じを与えるかもしれない。しかし、彼を強欲な欲張りで、やりたい放題の「利己的な人間」と考えることは妥当ではない。むしろごく普通の人間がその場その場を生きていくために必要なものを求めていると理解すべきである。そして、すでに述べてきたように、ステージごとに必要なものがちがっている。つまり、ほうやはごく普通の人間であって、特別な人間ではないと考える。

(5) 『ティリーのねがい』にみる「つらい仕事」からの解放

フェイス・ジェイクス (Faith Jaques) の『ティリーのねがい』(Tilly's House, 1979、小林いづみ訳、こぐま社、1993年)は、つらい仕事を強いられていた主人公ティリーがどのようにしてその仕事から解放されたかを教えてくれる。それは、自分のライフをどのように切り開いていくのかという問題にもつながっており、興味深い。

結論からいうと、つらい仕事を自主的にやめ、新たな生活をみずから再構築 (ライフ・リストラ) するのである。そのような仕事においては、これを今後も不承不承ながら受け入れて働くという選択肢もあるが、それでは長続きしないであろう。また、その仕事を押しつけている人びとと対決する選択肢もある。しかし、この場合、負けるおそれがあり、そのうえ「闘う”姿勢と信念”を強くもたなければならぬし、エネルギーも必要となる。そして、闘っている期間中は、普通の生活はできないかもしれない。

選択という意味では、この絵本はつらい仕事をみずからの責任と行動で

脱出することをすすめている。それは、つらい仕事をあまんじて継続する、雇っている人と対決して状況を変えさせる、のではなく、第3の「やめる」という選択肢である。以下では、ティリーがどのようにしてやめたかをみていこう。

場面はある家の2階にある子ども部屋である。木製のダンスがあって、その上に人形の家がある。この人形の家には木の人形の家族が住んでいた。1階に子どもの両親、2階にはふたりの子ども、そして地階の台所に料理番の女性とメイドのティリーがいる。

料理番のもとで、ティリーは過酷ともいえる労働を日々強いられている。食事の準備やあと片づけ、家中の掃除、洗濯やアイロンがけなど、多くの仕事を朝早くから夜遅くまでこなしている。台所には冷蔵庫などの電気製品はなく、すべて手仕事であり、時代は現代ではない。

料理番は仕事中彼女に小言を言ったりどなったり、もっともっとしっかり働くように命じている。この状態に彼女は「料理番に一日中あれこれ指図されるのは、もううんざり。ありがたいの一言もないんだもの」と心のなかで怒り、「自分のうちのためなら、どんなに働いたって、なんでもないのに」と思い始めている。

一日の仕事が終わるとティリーはくたくたになり、2階のさらに上にある屋根裏の小部屋のベッドに倒れこんでいる。このとき彼女は「現状のまま人生を終わりたいくない。自由に暮らせて、なんでも自分自身で決められる場所を見つけなくちゃ」という思いが強くなり、人形の家から脱出することを決意する。カバンに編み物と裁縫道具を入れ、ショールをはおり、大きなカサを手を持って1階まで降りていく。1階のカギがとれかかっていたので、なんなく人形の家を出ることができた。まずは最初のハードルをクリアしている。

しかし、ひとつのハードルを越えることはできたが、本当のハードルはそれからであった。人形の家を出たものの、そこはレースのかかったタン

スの上であり、この家の女の子がそばで眠るタンス上から、下の床に降りるのはかなり大変なことである。彼女はカサをうまく使い、レースの編み目に足場を見つげながら、懸命にがんばっている。これにより、このハードルをクリアするが、またつぎの障害が出現する。

部屋からは出たが、人形のティリーにとってとてつもない高さの階段が待っていたのである。「でも、なんとかして降りていなくては。そうよ、冒険なくして得るものはなしよ」と勇気をふるいおこして、カバンのふたにカサをさしこみ、一段ずつ階段のはしに手でぶらさがって下に降りることをくり返していく。これにより、下の階まで降りることに成功している。

そして、この家の玄関に到着したときには、彼女はすっかり疲れはてている。今夜はそれ以上のことはできないと判断して、階段の下の物入れのなかに赤い毛布が敷かれたバスケットがあるのを見つけ、そこをその夜のベッドにしている。

朝になるとぬいぐるみのクマのエドワードがあらわれ、ベッドはネコのおでかけ用のカゴなので、そこはリスクが高いと注意する。ふたりは会話を交わすなかで自然に信頼関係が生まれ、ティリーは人形の家のことを打ち明けて自分の家を見つげたいと言う。そして、エドワードは協力を約束し、この家のなかで可能ないくつかのプランを提案する。しかし、ティリーにとって安全で落ち着けそうなものではなかった。

ティリーは「だれかの家の片隅に住むのはもういやなの。私だけの家がほしいのよ。汚くてもボロボロでもかまはない。掃除したりいろんなものをつくったり一生懸命働いて、好きな家にするわ」と言う。

この話を聞いて、エドワードはこの家の庭の隅にある古い温室が何年も使われていないので、そこがすてきな家になると答えている。ティリーは喜び、さっそくエドワードの案内で温室に向かっている。しかし、彼女がこの家の外に出るのは生まれて初めてであった。自由へのドアは開かれたものの、庭は手入れがされておらず、草や花がジャングルのようにあり、虫やハチなども飛んでいる。カサをしっかりと握りしめていたが、足をとら

れたりして歩行は容易ではなく、これもハードルであった。

さて、このあとのストーリーは、使われていないモノがいろいろあるこの温室を整理しながら、エドワードの力も借りて、自分の家にするためにきわめて精力的に働いている姿がことこまかに書かれている。しかも、気に入るすてきな家にするには、多種多様な仕事をこなさなければならないが、ここでメイドとしてこれまでに獲得した「スキル」という経験が活かされている。要するに、ティリーの「家事力」は相当なものなのである。

そこでは、不要になったモノが再利用されて美しいモノに変わり活かされていくが、これをみると、人間の生活のあり方をどうしても考えざるをえない。一生懸命働いたあと、どのような家ができたのであろうか。

カラフルな絵が描かれた土の入った卵ケースにはデイジーの花が植えられ、家のなかにはいろいろなものを利用してつくったベッドのほか、クロスがかかったテーブル、柱の上に置いた花びん、少しヒビのある大きなカガミ、マッチ箱に魔法びんカバーの長い布をかぶせてつくったイスなどが備えられている。

ティリーはこれを実にうれしそうに見ている。そして、エドワードは感激し、すてきであると言う。ふたりはこの居心地のいい家で、これまでのことをふりかえり語り合っている。最後に「少しのやる気とがんばりなカサがあれば、どんなことでもできるね」とエドワードが言うと、ティリーはさらに「親切で役に立つ友の助けがあればね」と述べて、この話は終わっている。

これが、『ティリーのねがい』のストーリーである。劣悪な労働環境でメイドとして働いていた彼女は「つらい仕事」から脱出して、みずから家をつくるという「ライフ・リストラ」を行っている。

長時間労働を強いられるとともに、上司である料理番からきびしい指導を受けており、いわば「ブラックな職場」で彼女は仕事をしていた。このような状況のなかで、その職場をやめる選択を行っている。それは「逃

げる」というイメージのものかもしれない。料理番にさからってみても成功しそうにない。1階に住む主人に対して注文をつけるのもむずかしいように思われる。また、外部との関係もなく、仲間や組合もないので、対決してひとりで闘うことも無理である。

であれば、逃げたと思われたとしても、これしか選択肢はなかったと考えるべきである。これは卑怯でもなければ、勇気がないともいえない。よく考えると、このケースの場合、逃げるという行為はむしろ勇気あることであった。

彼女が人形の家を出ることを決意したあとに直面したいくつかのハードルはかなり困難であったが、それを克服できたのもこの勇気によるものである。長く人生を送った人間であれば、たいがいはこのような困難に直面するが、人形のティリーはきわめて短期間のうちに出会っている。

また、現状のまま人生を終わりたくなく、「自由に暮らせて、なんでも自分自身で決められる場所を見つけなくちゃ」という思いが、逃げるという行為の支えになっている。ここには強い意思が表明され、逃げる勇気をつくりだしている。

とはいえ、逃げるには勇気だけでは不十分であった。この絵本の最後のところで、エドワードは「少しのやる気」とならんで、「カサ」の存在を明らかにしている。少しのやる気はまさに勇気のことを指しているが、人形の家を出るときに、がんじょうなカサを持参させている。

このカサが必要なところで重要な役割を果たしている。①タンスの上から床に下りるとき、②家の2階から階段で1階に下りるとき、③手入れがされていない庭を歩くときのツエ、④温室のなかに家となる箱を見つけ、そこにたどりつくための手だて、などである。おそらく、カサがなければ、勇気があってもハードルを越えることはむずかしかった。道具という武器が勇気と結びついて、新しい生活を可能にしている。

さらに、ティリー自身が認めているエドワードという「親友」の存在が大きい。エドワードはこの脱出劇のなかでは途中から登場している。人形

の家そのものについては知らないが、彼の強みは人形の家を置いている家のことをよく知っていることである。つまり、この家の「情報」を十分にもっていた。それに対して、ティリーはこれに関する情報をまったくもっておらず、彼の情報がなければ、脱出だけでなく、新しい家づくりはおそらく困難であろう。

まず、彼女が一晩眠ったベッドはまずリスクが高いことをエドワードは知らせている。その後、ティリーには受け入れられなかったが、この家で彼女の家になりそうな場所をいくつか紹介している。そして、家の庭の隅に温室があり、それが彼女の家にふさわしいことを教えている。

しかも、新しい家にしようとする温室へ行くための情報はティリーには当然なく、それらのすべてをエドワードに依存しなければならなかった。家から外へどのようにして出るのか、ジャングルのような庭をどのように歩いていくのか、温室にはどのようにしたら入れるのかなど、すべてはエドワードの案内によっている。エドワードの情報によって無事温室に入ることができ、さらに、新しい家を具体的につくる過程でも、彼の助けが行われている。

ただし、最後にもうひとつ注目すべきは、ティリーの「主体性」が家づくりの過程で一貫して維持されていることである。古ぼけた温室はきたなくてボロボロであったが、それは「かまわない。掃除したり、いろいろなものをつくったり、一生懸命働いて、好きな家にするわ」という彼女の発言にそれが明確に示されている。

そして、皮肉なことではあるが、きびしい料理番のもとで苦しい労働を強いられた彼女は、メイドとしての力量がいっそう高められ、プロとしての「家事力」というスキルを身につけているという彼女の自負がその裏づけになっている。

4. 総括的な検討

①『葉っぱのフレディー』、②『かえでの葉っぱ』、③『ねこのくにのおきゃくさま』、④『おばけリンゴ』、⑤『ルピナスさん』、⑥『おおきな木』、⑦『ティリーのねがい』の7冊をとりあげてきたが、以下では、総括的な検討を行うことにする。

(1) 「人生四季論」をめぐって

ライフに関する2冊(①、②)は、「人生四季論」というライフ・コース(人生の進路)論にもとづいている。ライフ・コースには主な変わり目というべきステージがある。そして、2冊はともにライフを春・夏・秋・冬の4つのステージに分けている。ただし、ライフが春からスタートする①フレディと、秋から始まる②カエデとではちがいがみられた。葉っぱが木から離れるときの意味が前者が死、後者は誕生であり、これがちがいを生みだしている。

人生四季論については、⑥の『大きな木』にも見られる。ぼうやが少年から青年(子ども)、そして大人、つぎに引退、さらに高齢へと主なステージが識別されている。いうまでもないが、少年から青年が春、大人が夏、引退が秋、高齢が冬であり、フレディと同じものである。⑤のルピナスさんもほぼこれと同じであり、少女の時期、大人になって旅に出る時期、港の見える町に住む引退の時期、「ルピナスおばあさん」といわれる時期に分けられる。

興味深いのは、カエデの旅が秋から始まっていることである。木から離れるときに葉っぱとして自由に活動できるステージであり、それがいのちの誕生になっている。フレディにみられる春から秋までの成長から成熟の過程は考慮されておらず、誕生の準備段階としている。この誕生については、ルピナスさんも類似している。ただし、彼女が旅に出るのは秋ではなく、少し早い青年から大人になる時期である。

このような秋を誕生とする考え方には、きわめて大きな可能性を見つげることができる。春からはじまるものを「第一の誕生」とし、秋からのものを「第二の誕生」として、それを第二の誕生と考えれば、人生はこれまでとちがった拡がりをもつことになる。

かつて、40代の筆者は「人生80年時代」の到来を見据えてエッセイを書いたが、そのなかで“四分の一の思想”を考えだし、単純に80年を4等分して20歳までを春、40歳までを夏、60歳までを秋、そして、それ以降を冬としたことがあった。

しかし、実際に還暦を迎えたとき、60歳は暑い夏の終りで、それ以降は長い実りの秋となると修正したが、その思いは現在もある。秋に自由になって冒険の旅に出るというカエデの生き方に、現代の高齢社会が学ぶところはきわめて大きい。

(2) ライフにおける「役割」と「目標」

2冊のライフに関する絵本は、つぎに役割と目標の重要性を考えさせてくれる。フレディは役割を扱っている。葉っぱは木を支えるとともに、夏になると人間のために木陰をつくり、風を吹かせ、そして秋になると紅葉となって人の目を楽しませている。作者はこれが葉っぱの役割であり、「仕事」でもあるという。

この「役割=仕事」論には、当然異論があるだろう。仕事は一般的には、「生活の糧(かて)を得るための活動」あるいは「組織や個人に雇用されたり、依頼を受けて働き、それに対して報酬を受けとる活動」と考えられてきたので、それによれば、たしかに葉っぱが果たしていることは仕事にはならない。

しかし、仕事の定義を拡張して、たとえば「意識しようとしまいと、なんらかのかたちで、ヒト(他人や自己)のために役立つ活動」とするならば、葉っぱの役割は立派な仕事になる。そして、カエデの旅でも、美しいと見られたことで役割を遂行している。カエデは決して美しく見せようとは思っ

ていないが、そのように見られているから、「役割＝仕事」を果たしている。

その意味では、フレディの絵本では描かれていないが、春の若葉や新緑も、いうまでもなく、役割を果たしている。それは、公園で遊ぶ保育園の子どもたちを高齢者がうれしそうに見ているのと類似している。つまり、保育園児でさえ、他人（ヒト）に役立っている。

また、ネコの国の客人が行った歌と踊り、ルピナスさんが花の種をまく活動、大きな木がぼうやに与えた愛、ティリーを助けたエドワードの貢献も役割を果たしており、広義の仕事と考えることができる。問題があるとすれば、このような定義の拡張を許せるかどうかである。筆者としては、それを認める方向で考えたい。

つぎの目標であるが、カエデの葉っぱは遠くに行きたいという「人生の目標」（ライフ・ゴール、ライフ・ビジョン）を自覚的にもち、冒険の旅に出ている。一年間の旅でいろいろなものを見聞して経験を重ねている。そして、リスクを負いながらの旅は、自己実現に近いものをもたらしている。

要するに、漫然と生きるのではなく、目標をもって挑戦して生きることが大切であることが力説されている。しかし、なかなか明確な目標をもって生きることができないのも人生であり、それが多数派なのかもしれない。大きな木は愛を与えることを目標としているが、ぼうやにはライフ・ステージごとの目標というものはあるが、必ずしも人生の最終目標といったものをもっていたとは感じられない。

ルピナスさんとティリーは、その意味では具体的な人生の目標をもっている。祖父の影響もあって、ルピナスさんはまさに目標をもち、それを実現すべく生きている。それはまったくすばらしい。遠く旅に出ること、海辺の町に住むことを具体化しただけでなく、社会を美しくするというむずかしい目標をも実現している。

ティリーの場合、「苦しい状況」から解放されたいとして、果敢な行動をとっている。ただし、この解放は目標をもち、そのために勇気をだしただけでは実現されてはいない。いろいろな要因がうまく組みあわされて実

現していることを認識しなければならない。これについては、がんじょうなカサとエドワードという親友の存在があったし、さらにいえば、「家事力」というべきプロとしてのスキルをティリー自身が身につけていたことである。

解放は、別の言葉でいうと、「ライフ・リストラ」であり、生活や人生の再構築を意味している。人形の家の仕事や生活から脱出して、自分の家をつくるというティリーの意思と行動は、ライフ・リストラの典型である。“過労死（自殺）”が社会の関心を呼び、働き方が急務の課題となっている昨今であるが、このライフ・リストラの視点が大切である。

なお、『おぼけリング』のリング男の場合、リングづくりにこだわる理由は明確ではない。隣家に実がたくさんなるのに、自分の木にはならない。人間には競争心があって、近くの他人と比較しながら、なんとかしなければと思ったのであろうが、本当の理由は不明である。どんなに努力してもできないのであれば、普通の人間ならあきらめて別の選択をするが、この男は最後までリングにこだわっている。別の見方で、このこだわりを目標とみることにはできる。

(3) 仕事とライフの関係

ルピナスさんの場合、すでに述べたように、旅に出る最初の時期に図書館で働いており、そこでは明らかにいわゆる仕事を行っている。また、大きな木のぼうやは、本文には書かれていないが、大人のステージでは家庭をもっているとともに、仕事をしていたと思われる。

しかし、家庭生活や仕事生活は必ずしもハッピーではなかったようで、引退後には遠くに行きたくなっている。それは、カエデの葉っぱとはちがって、「現実逃避」や「いやし」の行動のように思われる。いずれにせよ、仕事はライフの一部であり、またある限定された時期に行われている。

ところで、ネコの国ではネコたちはもの足りなさを感じながらも、仕事だけのライフを送っており、「仕事＝ライフ」の状態であった。そして、客人のネズミは仕事以外に楽しむことがライフにあることを教えている。

つまり、作者は「ライフ＝仕事＋楽しみ」を主張している。これはきわめて明解であり、ライフにおいて働くことにだけ価値を見いだしている人びとにとって示唆的である。仕事のなかに楽しみを発見したり創造することも当然できるし、経営学の研究には、実際のところそのような主張も見られるが、仕事以外の生活の場面で楽しみをもつべきという。

そして、「仕事＝ライフ」的な主張は『おばけリング』にも見られる。個人生活のほとんどがリングづくりにあてられている。リングづくりという仕事がライフと統合され、混然一体になっており、“ネテモサメテモ”リングづくりにこだわっている。

ネコの国では仕事だけのライフにある種のもの足りなさを感じており、これを補完したり、あるいは代替するものとして楽しみという要素がでてきたのに対して、リングづくり自体に全面的に楽しみを見いだしていたと考えられる。そして、おそらくこの仕事に自己実現に近いものを感じているのであろう。

要するに、すでに3.の(2)で述べたが、この絵本は“おばけリング”と訳されているが、原書のタイトルは「リング男」であり、リングにこだわり続けた男の話なのである。かつてこのような人間は職人（クラフトマン）などの世界に存在しており、現代でも熟練を必要とする仕事や専門性の高い仕事に従事していると思われる。

仕事のなかでつらいことがあっても、リング男は幸せである。それに対して、ティリーの場合、人形の家で「苦しい仕事」を強いられている。そのうえ、働く時間は長くてくたくたに疲れてしまい、個人の生活にもそれが大きな影響を及ぼしている。彼女がどのような経緯で人形の家料理番のもとで働くことになったか明らかではないが、その仕事はきびしく苦しい。

仕事のきびしさがライフの苦しさに直接つながっている。仕事がかきびしくても、それと分断されて個人生活に楽しさを見つけられる余裕があればよいのだが、その余裕がないとしたら、仕事のストレスは解消できないままである。とすれば、ティリーがこの仕事を脱出して「ライフ・リストラ」

を考え、断行したのは当然のことである。「ブラック企業」の存在が話題になるなか、彼女の「自己防衛」に学ぶところは多い。

(4) 自立志向性と「他力」

最後に述べたいのは、自立への志向性に関するものである。これについては、仕事の実状がきびしい状態にあるティリーに、この志向性がきわめて強く現われている。彼女は「家事力」というスキルをもっているという強みもあるので、人形の家を出て、自分の家を自力でつくりたいと考えるのは当然であろう。

そして、ルビナスさんも自立の考え方をしっかりもっている。自分の力で世界の旅に出かけるとともに、3つ目の困難なライフ・ゴールも実現している。カエデの葉っぱも同じようにひとりで冒険の旅に出るが、それは自立の旅でもある。ひとり旅は人間の心を強くし、自立を促すことにつながる。

そして、ネコの国の客人となったネズミも、海を渡ってきた旅人である。ネズミがどのような背景で、いのちの危険をおかしてまでネコの国に来たかは定かでない。楽しさをネコたちに教えるというミッションをもったネズミは、最大の敵の国を訪問するという冒険を行っている。絵本をみるかぎり、みずから楽しさをつくっているネズミの姿に自立といったものは感じられないが、冒険の旅に出たことは確かである。

これらの事例は、きびしい仕事からの脱出や冒険の旅によって自立化が進められたことを示しているが、自立がどのようなものかを明らかにしたうえで検討されてはいない。ここで自立を、①ものごとを自分で考え、選択し、行動する、②「ライフ・ゴール」や「ライフ・ビジョン」をもち、それに向かって活動する傾向がある、③自分や周囲のことがよくわかっており、自己の「アイデンティティ」を確立している、④他者の考えや評価にあまり左右されず、「依存的」ではなく、孤立を恐れることが少ない、などの特徴をもつと仮定すれば、彼らにどのようなことがいえるであろうか。

ティリー、ルピナスさん、カエデの葉っぱ、そしてフレディの親友ダニエルは、自立性が強い典型的な事例である。また、4つの特徴をすべてもっているといえないが、おそらくネズミ、リング男、愛を与える木も自立していると考えられる。

さらに、検討が必要なのはフレディと大きな木の愛を受けるぼうやのふたりである。フレディは①と③の特徴をもつ友人を頼りにしており、ぼうやも主に③と④の特徴がある大きな木に依存している。つまり、この2冊の絵本は、自立性と依存性を対比させてストーリーを構成している。

フレディとぼうやは依存的である。しかし、両者の間にはちがいが見られる。前者は日常的に友人と接触をもっており、日々この友人に教えてもらっている。いわば、友人であると同時にメンターのような存在であり、カエデの葉っぱと少年に見られる対等な関係とは異なる。

それに対してぼうやの場合、子どものときはフレディと同じように日々大きな木と接触しているが、その後のライフ・ステージでは、接触は緊急時に限定されている。彼は本当に困ったときに大きな木に助けを求めている。日常的には自分で事にあたっており、そこでは主体性を発揮しているであろう。しかし、日常生活でどうしても自分で解決できないような問題が発生すると、自力ではなく「他力」に頼ろうとしている。

ところで、自立性といっても、「完璧な自立性」などありえない。自立性は程度の問題であって、他力があってこそ、生きていけるのである。きびしい状況におかれているほど、自立性への志向とともに、他力が必要となる。それは、7冊のなかでは、いうまでもないが、ティリーの場合が顕著である。エドワードの助けがなければ、彼女の家はとうていつくれなかった。そして、カエデも少年に出会うことがなければ、冒険の旅に出ることは無理であった。

なお、他力を提供することで、提供する側は広義の役割を果たし仕事を行っている。大きな木はぼうやに無償の愛を注いでいたが、その結果木は切り株だけになり、大きな木は無力感しか残らなかった。しかし、年若い

たぼうやに「座れるだけの切り株でいい」と言われることで、大きな木の心は救済される。最後になって、一方的に愛を与えてきた大きな木は、ぼうやのこの言葉つまり「他力」によって救われる。つまり、ぼうやも役割を果たして仕事を遂行していることになるが、他方で、大きな木のような立派な存在さえも、他力によって生かされたといわなければならない。

(2018. 1. 15.)